

仙石山仏教学論集
第5号（平成22年）

Sengokuyama Journal
of Buddhist Studies
Vol. V, 2010

『龍樹菩薩伝』の成立問題

山野 千恵子

『龍樹菩薩伝』の成立問題

山野 千恵子

鳩摩羅什訳『龍樹菩薩伝』は、現存する最古の龍樹伝として知られている。現在、大正蔵に収録されている本書は、鳩摩羅什自身によって著されたかどうかは疑問視されているものの、概ね同時代に成立したものと考えられている。しかし、近年、Stuart H. Youngが、この『龍樹菩薩伝』の成立問題をめぐり、『付法蔵因縁伝』を直接の典拠とし、後世に述作されたという新たな見解を提示した。筆者は、先に発表した「初期の龍樹伝」において、この問題を取上げ、大正蔵に収録された二本の『龍樹菩薩伝』、『付法蔵因縁伝』を比較検討した。今回は、大正蔵だけではなく、大正蔵が校訂で用いなかった趙城金蔵や、敦煌写本、日本に伝わる古写経などを調査し、『龍樹菩薩伝』の成立問題を再考したいと思う。

一、『龍樹菩薩伝』『付法蔵因縁伝』の成立に関するこれまでの見解

最初に、『龍樹菩薩伝』『付法蔵因縁伝』の成立、前後関係をめぐり、これまでの見解を確認しておきたい。『龍樹菩薩伝』と『付法蔵因縁伝』中の龍樹伝は、後に確認するように、内容の上で殆ど異ならず、また文章の上でも一致する箇所が多く認められる。この両者の前後関係については、古くは、Henri Masperoが、『付法蔵因縁伝』の成立問題を論じた中で、本書が『龍樹菩薩伝』をはじめとする様々な文献を寄せ集め、六世紀頃に中国で述作されたとする説を提示している [Maspero 1911, 142-143]。ちなみに『付法蔵因縁伝』が経録に登場するのは僧祐の『出三蔵記集』(515)である。『出三蔵記集』の記述によれば、『付法蔵因縁伝』は延興二年(472)に吉迦夜・曇曜(410-485)によって訳出されたという。しかし、後の時代の経録は、複数の「付法蔵(因縁)経」の存在を伝えており、Mas-

pero は現存の『付法蔵因縁伝』を、『出三蔵記集』に記される「付法蔵因縁経」とは別の文献であるとみなし、その成立を六世紀と仮定した。

[Maspero 1911, 133-139]。

Maspero は、『龍樹菩薩伝』が『付法蔵因縁伝』に先行するという前提で論を進めているが、この『龍樹菩薩伝』は、現在二本の系統が伝えられており、また『提婆菩薩伝』と重複箇所があるなど、問題の多い文献である [蓮澤 1936, 457-458]。こうした問題をかかえる『龍樹菩薩伝』を、オーセンティックな鳩摩羅什訳の論書と見なすことは、現在では疑問視されているものの、先にも述べたように、鳩摩羅什 (350-409 or 344-413) の時代よりさほど下らない時期に成立したと考えられている。例えば、Richard H. Robinson は、本伝が鳩摩羅什訳ではない可能性を示唆しつつも、僧叡 (352-436) の「大智釈論序」や、慧遠 (334-416) の「大智論抄序」の中に『龍樹菩薩伝』と一致する記述が見られることから、『龍樹菩薩伝』は同時代におそらく弟子が記録したものであろうとする見解を示している [Robinson 1967, 25]。

この Robinson の見解は、『龍樹菩薩伝』の成立に関する一般的な理解を代表しているといえる。しかし、近年、この説に異議を唱えたのが、Stuart H. Young である。Young は、僧叡や慧遠が記した龍樹の事蹟が『龍樹菩薩伝』の記述と一致しているとしても、これらの典拠が『龍樹菩薩伝』であった証左にはならないとし、むしろこれらが『龍樹菩薩伝』の典拠の一つとなった可能性を主張している [Young 2008, 104]。Young によれば、鳩摩羅什の時代に語られた龍樹のイメージは、『龍樹菩薩伝』のそれとは異なる特徴を有するという。それは、仏教が衰微し始める像法の終わりに現れた仏教の復興者としてのイメージである。彼らが語る龍樹は、正像末の仏教の年代記と関連付けられているが、『龍樹菩薩伝』にはこうした記述は見られないという [Young 2008, 143-145]。

この他にも Young は、現存の『龍樹菩薩伝』と鳩摩羅什の時代の龍樹伝の相違点として、前者には鳩摩羅什の時代には語られることのなかった新しい要素が加わっていると主張している。それは、龍樹が外道の王を改宗させた事蹟であり、これによって龍樹は、王権に対する仏法の優位性を

示す象徴的存在として描かれているという。Youngによれば、鳩摩羅什の弟子たちや慧遠が語っていないこの事蹟は、まさに『付法藏因縁伝』の龍樹伝（及び馬鳴伝、提婆伝）の中心課題であり、『龍樹菩薩伝』はこの『付法藏因縁伝』を直接の典拠として成立したのだと結論している〔Young 2008, 110-111, 144-145〕。

YoungはMasperoとは逆に、『龍樹菩薩伝』は『付法藏因縁伝』を典拠とし、後世、述作されたものと考えた。Youngは、現存する『付法藏因縁伝』を、『出三蔵記集』に記された延興二年（472）成立のものと考えており、その根拠として、『付法藏因縁伝』が典拠としている文献の中に、472年以降に成立したものが含まれていないことを指摘している〔Young 2008, 114〕。一方、『龍樹菩薩伝』が経録に登場するのは『歴代三宝紀』（597）以降である。『出三蔵記集』が掲げる鳩摩羅什訳の文献リストの中には、「龍樹菩薩伝」の名は見当たらない。これがYoungの主張する前後関係の一つの根拠となっている〔Young 2008, 145〕。もちろん、これだけでは根拠として十分ではなく、それを証明するには、二本の『龍樹菩薩伝』と『付法藏因縁伝』の詳細な比較を通した立論が必要となる筈である。しかし、こうした手続きをとらずに、Youngが従来説と全く反対の見解を提示し得たのは、先行する落合俊典の七寺本及び興聖寺本『馬鳴菩薩伝』の研究成果があったからである〔Young 2008, 65-69〕。

落合は、七寺及び興聖寺所蔵の一切経の調査により、現在、大正蔵に収められている『馬鳴菩薩伝』が、唐代の大蔵経所収のものではないことを発見した。道世『法苑珠林』（668）、慧琳『一切経音義』（783-807）に引用される『馬鳴菩薩伝』の語句は、大正蔵のそれとは一致せず、落合が発見した新出写本と一致している〔落合 1992, 298〕。落合は「七寺本と興聖寺本の写本系『馬鳴菩薩伝』は、唐仏教の正統な蔵経を転写したものであり、『大正蔵』に収載した高麗版や宋版系の『馬鳴菩薩伝』は何らかの理由で置き換えられたものと言うことができる」と結論し〔落合 1992, 298〕、新出写本『馬鳴菩薩伝』が、鳩摩羅什の弟子、僧叡の文章と相応していることを指摘した〔落合 1996, 562-567〕。

落合は、さらに大正蔵所収の『馬鳴菩薩伝』と『付法藏因縁伝』の前後

関係について言及しており、大正蔵所収の『馬鳴菩薩伝』は『付法蔵因縁伝』や『蔵寶蔵経』を元に述作されたという仮説を提示している〔落合 2000, 643〕。『馬鳴菩薩伝』の成立問題は、同じく鳩摩羅什訳として『馬鳴菩薩伝』とともに伝承されてきた『龍樹菩薩伝』の成立にも関係してくる。Young は、現存の『龍樹菩薩伝』も同様な事情で『付法蔵因縁伝』を元に述作されたのではないかという理解を前提に、論を進めているように見える。しかし、落合の発見した新出写本『馬鳴菩薩伝』のような龍樹伝の存在を Young は特に想定していない。

さて、以上のように『龍樹菩薩伝』の成立問題は、『付法蔵因縁伝』『馬鳴菩薩伝』（またここでは採り上げなかったが『提婆菩薩伝』）の成立問題とも関わり合い、非常に複雑なものとなっている。本論では、『龍樹菩薩伝』『付法蔵因縁伝』を比較検討し、また、二本の『龍樹菩薩伝』の流布状況を考察することを通して、『龍樹菩薩伝』の成立問題に関してこれまで指摘されてこなかった、いくつかの解明の糸口を提供したいと思う。

二、文章表現から見た『龍樹菩薩伝』『付法蔵因縁伝』の関係

大正蔵には、no. 2047a、no. 2047b の二本の『龍樹菩薩伝』（以下、a 本、b 本）が収録されている。前者は高麗大蔵経再雕本を底本とし、後者は明本（徑山蔵）を底本に、宋本（思溪資福蔵）、元本（普寧蔵）、宮本（宮内庁書陵部蔵宋本）を対校したものである。まずは、文章表現の上から、二本の『龍樹菩薩伝』、『付法蔵因縁伝』の相違を確認しておきたい。すでに拙稿「初期の龍樹伝」の中で検討した内容であるので〔山野 2009, 72-75〕、詳細はそちらに譲り、ここではその結論をまとめておきたい。

三本の文章表現にはパラレルな箇所もあり、貸借関係が想定され得るが、その前後関係が判然としない。まず、『龍樹菩薩伝』a 本と b 本であるが、表現が一致している箇所は多いものの、文章が全く異なっている箇所も少なからず存する。文章表現としては、a 本の方が、冗長な表現や、繰り返しを避け、簡潔な表現を好む傾向があり、b 本より整っている印象を与える。この点からのみいえば、a 本は、b 本を編集した結果であるようにも

見受けられるが、a本の冒頭部分が「龍樹菩薩者」で始まるのに対し、b本の冒頭部分が「大師名龍樹菩薩者」で始まっているのは、明らかに、後者が『馬鳴菩薩伝』『提婆菩薩伝』とセットとして編集された結果である¹。a本、b本はともに、度重なる編集の手を経ているのかもしれない。なお『龍樹菩薩伝』a本、b本が、一度に一人の人物の手によって成立したものではない可能性は、用語の不統一からも伺える。後に確認するように、『龍樹菩薩伝』は、いくつかのパーツを組み合わせたような構成になっており、「brāhmaṇa」に相当する語をあるパートでは「梵師」とし、異なるパートでは「婆羅門」としている。同様に、「caitya」に相当する語も、「塔」「廟」二様の用語が当てられている。もちろん、一人の人物が異なる用語を用いた可能性も考えなくてはならない。そのため、ここでは、複数の手になる伝を編集して『龍樹菩薩伝』がまとめられた可能性もあることを指摘するととどめ、次節以下でこの可能性を検証することにした。

次に、『龍樹菩薩伝』a本、b本と、『付法藏因縁伝』の関係であるが、三者を比較すると、『付法藏因縁伝』は使用している字句において、b本よりもa本に近く、字句を共有しているケースが多い。このことから、先行研究が指摘してきた通り、一方が他方を参照したであろうことは大いに考え得る。なお、『付法藏因縁伝』は、四字一句の形式をとっている。したがって、『付法藏因縁伝』と『龍樹菩薩伝』の文句が一致する箇所は全て、一句四文字に整っている。両者の間に、直接の前後関係があるとすれば、『付法藏因縁伝』が、『龍樹菩薩伝』の使用可能な箇所をそのまま使い、その他の場所を一句四文字に整えたか、あるいは、『龍樹菩薩伝』が『付法藏因縁伝』をある部分そのまま拝借し、ある部分はランダムな散文に改変したか、そのどちらかであるだろう。Masperoの説に従えば、その前者であったということになるだろうし、Youngの説に従えば、その後者であったということになるだろう。しかし、文章を並べて見ると、一方を直接の典拠として他方が創作されたようには見えない。むしろ、『龍樹

¹ 南宋版系の『馬鳴菩薩伝』『龍樹菩薩伝』『提婆菩薩伝』は、それぞれ「有大師名馬鳴菩薩」「大師名龍樹菩薩者」「大師名提婆菩薩者」ではじまる。磧砂藏では「三経同卷」として板刻されている。

菩薩伝』の元となり、かつ『付法蔵因縁伝』が参照したであろう第三の資料を想定する方が妥当であるように見える。ただし、その資料を元に『龍樹菩薩伝』a本が編集された過程において、『付法蔵因縁伝』を参照したということは大いに考えられるのではないだろうか。

三、『龍樹菩薩伝』『付法蔵因縁伝』の内容の比較

次に、内容の上から、二本の『龍樹菩薩伝』『付法蔵因縁伝』の相違を確認しておきたい。詳細は前述の拙稿に譲り〔山野 2009, 75-92〕、ここでもその結論をまとめておく。

三本の構成は下表のように、大体において一致しているが、ある本においては説かれ、ある本においては省略されている段が或る。8「門神の呵責」と、9「弟子との会話」の段がそれである。この両段を説いているのは『付法蔵因縁伝』のみであり、『龍樹菩薩伝』a本は9のみを説き、b本は両段を欠く。

この両段では、龍樹が慢心を起こし、自ら「一切智者」と名乗るが、ある時、その慢心を門神から呵責され、またある時、弟子から「一切智者でありながら仏弟子である」という矛盾を指摘されるという、龍樹にとっては甚だ不名誉な内容を含んでいる。この両段が、西域から伝えられたであろう龍樹伝に本来存在していたのか、後から付加されたのか、ということが問題となるが、この両段を欠くと、話の前後の流れが寸断されてしまい、不自然さが残る。そのため、本来の龍樹伝は、この両段を具えていたと考えるのが妥当であろう。

さて、隋・唐代に伝承されていた龍樹伝を知る上で、貴重な資料が数点ある。吉蔵（549-623）は、『華嚴遊意』において、「録雖不載相承云」として²、龍樹が口の上手い弟子に唆されて、新戒、新衣を制定しようとした

² 『龍樹菩薩伝』が最初に経録に登場するのは『歴代三宝紀』（597）である。『歴代三宝紀』の成立年は吉蔵の壮年期にあたるが、『華嚴遊意』は『歴代三宝紀』以前に記されたものと考えられる。龍樹伝がこの時代、経録不載の相承として伝えられていた貴重な証言である。

	龍樹菩薩伝 a 本	龍樹菩薩伝 b 本	付法藏因縁伝
1 毘羅から龍樹への付法			50.317b
2 出自	50.184a	50.185b	50.317b
3 名の由来 (=20)			50.317b
4 幼年期	50.184a	50.185b	50.317b
5 隠身業	50.184a-b	50.185b-c	50.317b-c
6 王宮での悪事	50.184b	50.185c	50.317c
7 修学と遊行	50.184b	50.185c	50.317c
8 門神の呵責			50.317c-318a
9 弟子との会話	50.184b-c		50.318a
10 教誡を立てる	50.184c	50.185c-186a	50.318a
11 龍宮訪問	50.184c	50.186a	50.318a
12 南天竺王の改宗 (=16)		50.186a-b	50.318a-b
13 外道の改宗			50.318b
14 著作	50.184c	50.186b	50.318b
15 法力合戦	50.184c-185a	50.186b	50.318b-c
16 南天竺王の改宗 (=12)	50.185a		
17 蟬蛻	50.185a-b	50.186b	50.318c
18 生存時期	50.185b	50.186b	
19 立廟	50.185b	50.186b-c	50.318c
20 名の由来 (=3)	50.185b	50.186c	
21 追記	50.185b	50.186c	

とするエピソードを伝えている³。弟子が龍樹の矛盾を指摘するというエピソードが、ここでは、さらにその弟子が龍樹を唆し、新戒、新衣を制定させたという話に発展しているが、ともかく、吉蔵の参照した龍樹伝には、この「弟子との会話」の段が含まれていたことがわかる。また、唐代成立

³ T no. 1731 『華嚴遊意』序 35: 1a。

且、話闍浮得有此經。録雖不載、相承云。龍樹有佞弟子。勸其師、令與釋迦並化。師智徳如此。宜作新佛。豈爲釋迦弟子。即然其所言。剋日月、別制新戒新衣、使大同小異。坐水精房中、思惟斯事

の『金剛暎』の敦煌写本の裏面に記された龍樹伝には、門神の呵責のエピソードが記されており、『付法蔵因縁伝』にも記されていない物語の詳細を伝えている⁴。これらの事情を勘案すると、西域から伝えられたであろう本来の龍樹伝には、この両段が存在し、そのエピソードは『付法蔵因縁伝』や『華嚴遊意』、『金剛暎』裏面の文献に伝えられたが、『龍樹菩薩伝』は、龍樹にとって不名誉な記事を省略した可能性が高いといえる。この点においては、二本の『龍樹菩薩伝』よりも、『付法蔵因縁伝』の方が、本来の龍樹伝の形を伝えているように見える。

次に、三本の構成において相違がみられる箇所は、12=16「南天竺王の改宗」の段である。『付法蔵因縁伝』と『龍樹菩薩伝』b本は、構成順序が一致しているが、a本のみ順序が一致しない。12=16「南天竺王の改宗」の段において、龍樹の巧みな方便によって外道の信仰を捨て仏教へと改宗した王が、15「法力合戦」の段において、龍樹に不遜な態度を取る外道をたしなめる王と、同一人物であると想定されるなら、a本の構成順序は明らかに不自然であり、編集の過程で生じた混乱であるように見える。しかし、『龍樹菩薩伝』が複数の手になる伝を編集したものであったなら、こうした構成順序が、編集過程の遅い時期に生じたものではなく、本来的なものであった可能性も考えられる。

『龍樹菩薩伝』全体の構成から言えば、前段の「龍宮訪問」までで一続きの物語は完結している。隋・唐代に伝承されていた龍樹伝を再び参照するなら、『金剛暎』裏面の龍樹伝では、a本の構成順序通り、「龍宮訪問」に続いて「著作」までを記し、そこで伝記は完結している⁵。また、吉蔵(549-623)が『大乘玄論』の中で伝えている龍樹伝は、「龍宮訪問」までを

⁴ 香雪美術蔵敦煌写本。写本は未見。書写年代については不明である。ここでは大正蔵の古逸部に収録されたものを参照した。

T no. 2734『金剛暎』卷上 85: 65b

即便發心出家入於深山。隱九十日中備用三藏。自是一切智人。西方諸寺例有三門。兩邊門者比丘出入。其中門者唯以往來。自佛滅度後中門常同。龍樹息具一切智。開門出入因被神打悶絕而死亦得蘇息。遂往名室、於彼不久恐門大怪、變石室皆作琉璃「以」は佛、「息」は謂、「名」は石の誤写であろう。

⁵ T no. 2734『金剛暎』卷上, 85: 65b

説いた後、そこで物語はいったん中断し、「南天竺王の改宗」を説かずに、a 本同様、唐突に「法力合戦」のエピソードがくる⁶。これらの事実から、a 本の構成順序が、隋・唐代に遡り得ること、また『龍樹菩薩伝』がいくつかの物語のパーツを組み合わせて成立したであろうことを確認できる。その一方、道世（- 683）の『法苑珠林』（668）が「龍樹菩薩傳并付法蔵傳云」として伝えている龍樹伝は、『付法蔵因縁伝』と『龍樹菩薩伝』b 本の順序にしたがっている⁷。ただしこれは『法苑珠林』が、『付法蔵因縁伝』を参照した結果であるように見える⁸。

さて、さらに「南天竺王の改宗」には、a 本のみで説かれる導入部の増広箇所が存する。そしてこの増広箇所は、以下で確認するように『提婆菩薩伝』と重複している。続く13「外道の改宗」の段は、前段の王の改宗に引き続き、龍樹が重ねて国の外道たちを論破し、仏教に改宗させたことについて語る、このエピソードの帰結部分である。この段を説くのは、『付法蔵因縁伝』のみであり、二本の『龍樹菩薩伝』はこれを説かない。そして、この部分もまた『提婆菩薩伝』の内容と類似している。一体、この『付法蔵因縁伝』、二本の『龍樹菩薩伝』、『提婆菩薩伝』の関係を、どのように考えればいいのであろうか。

『付法蔵因縁伝』、二本の『龍樹菩薩伝』、『提婆菩薩伝』の重複箇所を整理してみよう。

『付法蔵因縁伝』中の龍樹伝においては、龍樹が王の護衛となり、王を教化する機会を七年間うかがっていたとする簡略な導入部に続き、天と阿修羅の戦いを空中に現じる神変を龍樹が示し、王を改宗させたとするエピソードが詳細に語られる。そして、この出来事を聞きつけた外道たちが雲集し、龍樹に論争を挑んだが、ある者は一言で、また智慧のある者でも二日で龍樹に降伏し、一ヶ月の間に皆悉く仏教に改宗してしまったという帰

⁶ T no. 1853 『大乘玄論』 卷第五, 45: 77a-b

⁷ T no. 2122 『法苑珠林』 卷第五十三, 53: 682c
ただし、天と阿修羅の闘いのエピソードは説かない。

⁸ 『法苑珠林』では、「門神の呵責の段」「弟子との会話」を説いているから、『付法蔵因縁伝』の構成に従っていると見てよいだろう。

	付法蔵因縁伝 龍樹伝	龍樹菩薩伝 a 本	龍樹菩薩伝 b 本	付法蔵因縁伝 提婆伝	提婆菩薩伝
導入部	略	広	略	広	広
天と阿修羅の戦い	○	○	○		○
外道との弁論試合				○	○
帰結部	広			略	広

結部が簡略に説かれる。

一方、『付法蔵因縁伝』中の提婆伝においては、提婆が、王を教化するために一計を案じ、募集に応じて護衛の将となって軍をよく統制していたところ、王の目に留まり、御前に召されるという物語の導入部がやや詳しく説かれ、続いて、そこで提婆が王に弁論の御前試合を申し出たところ、八方より論師が雲衆したというエピソードを説く。そして、ある者は一言で、また智慧のある者でも二日で、提婆に論破されてしまったとする帰結部が説かれる。

蓮澤成淳は、天と阿修羅の闘いを説く龍樹伝と、外道との弁論試合を説く提婆伝とが、導入部を共有していたため、『提婆菩薩伝』に混乱が生じたのであろうと結論している [蓮澤 1936, 465]。天と阿修羅の闘いのエピソードが、本来、龍樹伝に属していたことは、僧肇の『注維摩詰経』の記述からも間違いなく⁹、『提婆菩薩伝』における「天と阿修羅の闘い」は、龍樹伝からの混入とする蓮澤の見解は妥当であるだろう。さて残る「導入部」「帰結部」の対照から、各本の関係を考察してみよう。五本を比較すると、a 本は「導入部」を『付法蔵因縁伝』提婆伝から拝借し、『提婆菩薩伝』は「帰結部」を『付法蔵因縁伝』龍樹伝から拝借し、物語を補ったように見える。『龍樹菩薩伝』a 本、『提婆菩薩伝』の両伝は、『付法蔵因

⁹ T no. 1775 『注維摩詰経』 卷第二, 38: 339a

付曰。因神通廣其化功。亦以神通力證其辯才。如龍樹與外道論議。外道問曰。天今何作。答曰。天今與阿修羅戰。復問。此何以證。菩薩即爲現證。應時。摧戈折刃阿修身首從空中而墜落。又、見天與阿修羅於虛空中列陣相對。外道見證已、乃伏其辯才。神通證辯類如此也。

ただし、ここでは問答の相手は王ではなく、外道となっている。

縁伝』を参照して物語を増広した結果、現在の形になった可能性が考えられるだろう。

四、流布状況から見た『龍樹菩薩伝』の成立問題

大正蔵が『龍樹菩薩伝』の校訂に用いた版本は、高麗大蔵経再雕本、明本（徑山蔵）、宋本（思溪資福蔵）、元本（普寧蔵）、宮本（宮内庁書陵部蔵宋本）であるが、現在では、趙城金蔵をはじめ、大蔵経が参照した版本以外の『龍樹菩薩伝』が発見されている。また、目下刊行中である中国国家図書館編『国家図書館蔵敦煌遺書』には『龍樹菩薩伝』の遺文が二点確認でき、日本の古写経の中にも、数本の『龍樹菩薩伝』が存在していることが明らかになっている。ここでは、新たに加わった資料を参照し、『龍樹菩薩伝』の流布状況から、a本、b本の成立問題を考察したい。

まずは、中国国家図書館編『国家図書館蔵敦煌遺書』¹⁰に収録された『龍樹菩薩伝』の遺文から確認することにした。以下に翻刻と校異を掲載しておく。

- 一、□は一字欠損
- 一、……は二字以上欠損
- 一、（ ）は文字の一部が欠損し、判読が確定的ではないもの
- 一、便宜上、行頭に行番号を付した

BD10265 號 龍樹菩薩傳

- 1 在靜（室）水精（房）……………
- 2 之即接之入海（於）……………
- 3 □□□奥（経）……………

¹⁰ 中国国家図書館編『国家図書館蔵敦煌遺書』第七冊（北京図書館出版, 2009）: 55, 85（書誌情報）212, 337（図版）

校異

行番号	BD10265 號	龍樹菩薩伝 a 本	龍樹菩薩伝 b 本	備考：七寺・興聖寺
1	室	處	室	屋
1	水精（房）	水精房	水精地房	水精房
2	之	之	ナシ	之

BD10498 號背 龍樹菩薩傳

- 1 ……（於）龍宮殿中發七寶……………
- 2 （方）等深□（經）典无量妙法授……………
- 3 （讀）九十日中通解甚多其心深入體得（寶）……
- 4 □心而（問之）曰看經遍未答言汝諸函中……………
- 5 □可盡也我可讀者已十倍於閻浮提（龍）……………
- 6 □宮中所有經典言諸處此比復不可數龍樹既得
- 7 諸經壹相深入无生（二）……………出於南天
- 8 竺大弘佛教摧伏外……………（作優）□□
- 9 舍十万偈又作疋嚴……………
- 10 中論五百偈令摩（訶）……………

校異

行番号	BD10498 號背	龍樹菩薩伝 a 本	龍樹菩薩伝 b 本	備考：七寺・興聖寺
1	發七寶…	開七寶藏發七寶華函	開七寶藏發七寶函	發七寶函
2	无量妙法	無量妙法	無上妙法	无量妙法
3	通解	通解	通練	通解
5	我可讀者	我可讀者	我所讀者	我所讀者
6	不可數	不可數	不可知	不可數
6	既得	既得	即得	既得
7	諸經壹相	諸經一相	諸經一箱	諸經一箱
8	佛教	佛法	佛教	佛教

両者とも5世紀南北朝時代の写本とされているが、この年代は確定的ではないだろう。BD10265 號に記されているのは、龍樹が慢心をおこし、水

精房に独座していたところ、大龍菩薩が憐れんで龍宮に招いたとするくだりである。BD10498 號背に記されているのは、同じく龍宮訪問のくだりであり、続いて龍樹の著作について記されているため、a 本と同じ構成であることが確認できる。

上記の箇所を a 本、b 本と比較してみよう。BD10265 號は、字句は a 本に近いといえるが全同ではない。BD10498 號背もまた、a 本に近いが全同ではなく、b 本と一致している箇所もある。なお、「發七寶…」の語句は、a 本、b 本に一致せず、日本の古写経と一致している点が興味深い。これらの断片から確認できることは、敦煌写本に遺された宋代の開版以前の『龍樹菩薩伝』が、a 本に近いものであったということである。しかし、字句が b 本と一致している箇所もあることは、a 本、b 本が、直接的に a から b、あるいは b から a という関係にないことを示唆している。

次に、併せて、日本の古写経の中に現存する『龍樹菩薩伝』を確認しておこう。先にも述べたように、落合が発見した七寺及び興聖寺所蔵の『馬鳴菩薩伝』は、唐代の大藏経に収められていた本来の『馬鳴菩薩伝』の形を伝えたものであり、現在『大正藏』に収録されている『馬鳴菩薩伝』とは異なるものであった。落合の指摘によれば、『大正藏』に収載された『馬鳴菩薩伝』は、宋代に何らかの理由で置き換えられたものであるという [落合 1992, 298]。日本に現存する古写経を調査することは、大藏経が宋代に開版される以前、写本として流布していた時代の姿を知る手引きとなる。ここでは、落合が発見した『馬鳴菩薩伝』とともに書写された、七寺及び興聖寺所蔵の『龍樹菩薩伝』を資料として用い、a 本、b 本と比較したい。

七寺一切経の『龍樹菩薩伝』は、平安末期の書写とされる¹¹。宋代以降に開版された刊本からの転写本ではなく、『馬鳴菩薩伝』と同様、奈良時代以来、日本で転写されてきたものである。誤写が多いため、これのみでは奈良時代の写本の姿に遡ることは非常に困難である。しかし幸い、同系統の写本が数本、存在しており、転写を繰り返した際に生じたであろうミ

¹¹ 七寺一切経は承安 5(1175)年から治承 4(1180)年にかけて書写された。

スを推測することができる。一方、興聖寺一切経の『龍樹菩薩伝』は、「貞應三年十一月廿日書了」の奥書があり、鎌倉時代、1224年の書写であることが判明している¹²。七寺一切経と同系統の奈良写経の転写本であるが、こちらは誤写が少なく、奈良時代の写本の内容をほぼ復元することが可能である。

七寺及び興聖寺所蔵の『龍樹菩薩伝』は、結論から言えば、a本と同系統のものである。しかし、a本、つまり高麗大蔵経再雕本と全く一致している訳ではない。以下に、七寺本、興聖寺本を、高麗大蔵経再雕本、そして、高麗大蔵経と同じく開宝蔵を底本に開版された趙城金蔵と比較し、その文言の異同を確認する。なお、同系統の写本と比較し、七寺本あるいは興聖寺本のみに見られる明らかな誤写は除いた。

- 一、行頭の頁、行はa本のものである。
- 一、対応する文がない場合は-----で示した。
- 一、判読不明字は●で示した。

¹² 興聖寺本についての書誌情報の詳細は、京都府古文書調査報告書第十三集『興聖寺一切経調査報告書』（1998）：267, 398を参照。

頁	行	高麗再雕本	趙城金藏	七寺本	興聖寺本	備考：b本
184a	19	南天竺	南天竺	南天竺人	南天竺人	南天竺
	22	天文地理	天文地理	天文地理	世學藝能天文地理	世學藝能天文地理
	25	聘情極欲	聘情極欲	聘欲想情	聘欲極情	聘情極欲*1
184b	1	此	此	然	然
	2	不可復屈	不可復屈	不復可屈	不復可屈	不復可屈
	3	不知	不知	不令知術	不令知術	不知
		永當師我	永當師我	當求師我	當求師我	求可以術屈為我弟子*2
	5	汝形當隱无人見者	汝形當隱无人見者	汝形當隱无見之者	汝形當隱无見之者	無有人能見汝形者
		聞其氣	聞其氣	聞其香氣	聞其香氣	聞氣
	7	分數多少	分數多少	分數少多	分數少多	分數多少
	9	師	師	術師	術師	師
		即	即	ナシ	ナシ	即
	12	免罪咎	免罪咎	勉罪各	勉罪咎
	14	有舊老	所有舊老	有舊老	有舊老	有舊老
	15	諸門中	諸門中	諸門外	諸門外	諸門中
	17	可以術滅	可以術滅	可以咒滅	可以咒滅	可咒除
	19	揮刀	揮刀	揮劔	將力	揮刀*3
	20	依王頭側王頭側七尺	依王頭側王頭側七尺	依王王頭側側七尺	依王、頭、側、七尺*4	依王頭側王頭側七尺
	23	既出入山	既出入山	既得脱	既出家	既而得出入山
	24	誦三藏盡	誦三藏盡	讀誦通三藏	誦通三藏	誦三藏盡*5
	26	摩訶衍經典	摩訶衍經典	摩訶衍經	摩訶衍經	摩訶衍經
	27	未得通利	未得通利	未得道利	未得道理利	未得通利*6
		外道弟子	外道弟子	外道李*7	外道弟子
184c	1	將未足耶未足一事	將未足耶未足一事	將未足下	將未足事
	3	故有未盡未盡之中	故有未盡未盡之中	猶故未盡未盡之中	猶故未、盡、之、中*8	故未盡未盡之中
	4	以悟後學	以悟後學	以學*9	以悟後學	以悟後學
	7	除衆人情	除衆人情	除衆人情疑	除衆人情疑
		示不受學	示不受學	示求受學	示不受學
	8	獨在靜處	獨在靜處	獨在靜屋	獨在靜屋	獨在靜室
	9	其如是惜	其如是惜	其此情	其如此惜	其如此惜
	10	開七寶藏發七寶華函	開七寶藏發七函	發七寶函	發七寶函	開七寶藏發七函

	11	授之	授寶華之*10	授之	授之	授之
	13	問之曰	問之	問之曰	問之曰	問之曰
	14	我可讀者	我可讀者	我所讀者	我所讀者	我所讀者
	16	諸經一相	諸經一箱	諸經一箱	諸經一箱	諸經一箱
	17	大弘佛法	大弘佛法	大弘佛教	大弘佛教	大弘佛教
		作優波提舍	作優波提舍	作憂婆提舍論	作意憂婆提舍論	作優波提舍
	24	智與聖心並照	智與聖心並照	智与聖人普照	智与聖人並照	智与聖心並照*11
	26	政聽殿上	政德殿上	德殿上	政德殿上	政德殿上
	28	而	而	ナシ	ナシ	而
		誇龍樹	訶龍樹	訶龍樹	訶龍樹	訶龍樹
	29	而	而	ナシ	ナシ	而
185a	1	化作	化作	作	作	化作
		六牙	六牙	一六牙	一六牙	一六牙
		白象	白象	白鳥	白鳥	白象
	4	啓其愚蒙	啓其愚蒙	憊啓其遺賸	憊啓其愚賸	啓其愚蒙
	6	皆化其道	皆伏其道	皆化其道	皆化其道
	8	應募為其將	募為其將	募為（以下一行脱落）	募為其將
	10	答言	答言	答曰	答曰
	12	答言	答言	答曰	答曰	答曰
	13	問言	問言	門之言	問之言	問之言
	16	猶不足名	猶不足名	猶不若名	猶不足名	猶不足名
	17	遲疑	遲疑	持疑	特疑	遲疑
	18	王聞此言	王聞此言	王得此言	王得此言	王聞此言
	19	不得吐又不得咽	不得吐又不得咽	不得受不得●	不得咄又不得●	不得吐又不得咽
	20	无事可明	无事可明	无以可明	无以可明	无事可明
	21	此非虛論求勝之談	此非虛論求勝之談	此非虛論求勝之談耳	此非虛論求勝之談耳	此非虛論求勝之談
	24	龍樹言搆之虛言	龍樹言搆之虛言	龍樹目連之虛言	龍樹曰搆之虛言	龍樹言搆之虛言
	28	成就戒	成就戒	衣就戒	衣就戒	成就戒
		一小乘法師	一小乘法師	小乘法師	小乘法師	一小乘法師
		常懷忿疾	常懷忿疾	當懷忽嫉	常懷忿疾	常懷忿疾
185b	1	所不願也	所不願也	不願也	不願也	不願也
	3	過百歲	過百歲	過五百歲	過五百歲	過百歲*11
	4	阿周陀那	阿周陀那	阿周那	阿周那
	5	号曰龍樹也	号曰龍樹也	●号也曰龍樹也	號由龍樹也	號曰龍樹也
	6	付法藏傳	付法藏經	付法藏經
		長壽二百餘年	長壽三百餘年	三百餘年

- * 1 騁欲極情：宮
- * 2 求可以術屈為我弟子：徑・宮・清、永當師我：資・磧・普・南
- * 3 拔刀：宮
- * 4 「依王頭側王頭側七尺」をこのように表記する。
- * 5 誦三藏：宮
- * 6 未得道利：宮
- * 7 「李」は弟子の誤写であろうが、他本にも見られたため表にのこした。
- * 8 「猶故未盡未盡之中」をこのように表記する。
- * 9 「悟後」の脱落は誤写であろうが、他本にも見られたため表にのこした。
- * 10 「寶華」の二字は後から加えられたものであるが、本来は、上の開七寶藏發「寶華」七函と加えるべきところを誤ったものと思われる。
- * 11 智与聖人並能：宮
- * 12 大正藏は「猶不是名」とするが、高麗大藏經は「猶不足名」とする。大正藏の誤記であろう。
- * 13 百歲：宮

ちなみに、高麗大藏經と趙城金藏の本文中（古写本には見られない付記部分は除く）の相違箇所は九箇所ある。七寺本、興聖寺本は、このうち、四箇所を高麗大藏經と文言を等しくし、五箇所を趙城金藏と等しくしている。これだけを見れば、七寺本、興聖寺本は、開宝藏を底本としたとも考えられるのであるが、上表のように、高麗大藏經とも趙城金藏とも異なる箇所が多数ある。これらの相違箇所の中には、古写本がむしろ正しいと思われる文言を採用し、高麗大藏經、趙城金藏が誤写した文言を採用しているケースがある。184c14「我可讀者」の「可」は、おそらくは「所」の異体字からの誤写であり、古写本の方が正しいだろう。185a24「常懷忿疾」もまた、古写本の「常懷忿嫉」に訂正するべきである。また、これらのうちには、転写の際に生じた相違ではなく、編集上の相違と見られるものもある。例えば、184b3「不知」を「不令知術」とする古写經の表現は、意味が正確に取れる。185a21「此比虚論求勝之談」は、古写本では「耳」の字を補った「此比虚論求勝之談耳」という表現になっており、意味が強調されている。

これら高麗大藏經とも趙城金藏とも異なる文言のうちのいくつかは、むしろb本と一致している場合もある。興聖寺本では、184a4「世學藝能」

のように、b本にしか見られない文言が挿入されているケースもあった。この文言が、日本において後から書き加えられたのではなく、唐代の写本の姿を伝えるものであるとすれば、『龍樹菩薩伝』a本、b本の成立に関して、興味深い示唆を与えてくれるだろう。

日本の古写経系の『龍樹菩薩伝』は、高麗大藏経や趙城金藏、つまり開宝藏を元にした北宋版系に近く、この古写経系の『龍樹菩薩伝』は落合が発見した『馬鳴菩薩伝』とともに書写されていた。一方、b本、つまり南宋版系の『龍樹菩薩伝』は、現在、大正藏に収録されている『馬鳴菩薩伝』『提婆菩薩伝』とともに板刻された。南宋版系の大藏経開版の際に採用されたb本は、しかしながら先行する北宋版系の版本から直接に編集されたものではなく、開宝藏が開版される以前に流布していた写本の形を伝えている部分もあることが、敦煌写本、日本の古写本から確認できた。以上の状況を勘案すれば、a本、b本は、直接的にaからb、あるいはbからaという関係にあるのではなく、元にあった資料から、それぞれ編集と転写を繰り返した結果、成立したテキストであったと見てよいのではないだろうか。

まとめ

『龍樹菩薩伝』a本、b本の流布状況から新たに導き出されたことは、これらが直接的に一方から他方へ編集された結果ではなく、元にあった資料から、それぞれ編集と転写を繰り返した結果、成立したテキストであった可能性が高いということである。この元の資料に関連して、隋代の吉蔵が『華嚴遊意』の中で述べている証言は貴重である。先にも述べたように、吉蔵は『華嚴遊意』の中で「録雖不載相承云」として龍樹の事蹟について語っている。『龍樹菩薩伝』が最初に経録に登場するのは『歴代三宝紀』(597)であり、その成立年は吉蔵の壮年期にあたる。『華嚴遊意』は、『歴代三宝紀』以前に著された可能性があり、そのため吉蔵は、『出三藏記集』(515)に記載されていない「相承」として、龍樹の事蹟を語ったものと思われる。つまり、『歴代三宝紀』以前、この龍樹の伝記は『龍樹菩薩伝』

という名称を冠した鳩摩羅什訳の論書として広く認識されていなかった可能性があるということである。『龍樹菩薩伝』は、文章表現の上から見ても、一度に一人の人物の手によって成立したものではない可能性があり、複数の手になる伝を編集して成立したことも想定される。a本の構成順序の混乱は、その証左であるように見える。a本が編集を繰り返していった過程において『付法藏因縁伝』を参照した可能性は高い。a本は文言において『付法藏因縁伝』に近く、また『付法藏因縁伝』中の提婆伝を参照して、物語を増広したと見られる箇所があるからである。

さて、敦煌写本や日本の古写経の『龍樹菩薩伝』は、a本に近いものであった。また、吉蔵が『大乘玄論』の中で紹介している龍樹伝も、構成、文言はa本に近い。これによって、隋・唐代に流布していた『龍樹菩薩伝』は北宋版系に近いものであったことが想定される。この『龍樹菩薩伝』は、落合が発見した『馬鳴菩薩伝』とともに書写されていたことが、日本の古写経から確認できる。一方、南宋版系に採用されたb本は、現在、大正蔵に収録されている『馬鳴菩薩伝』『提婆菩薩伝』とセットとされ、最終的に編集されたものである。しかしながら、その文言は、開宝蔵以前の写本の形を伝えている部分もあり、既存の版本から編集した結果であるようには見えない。

現存する二本の『龍樹菩薩伝』の元となった「龍樹伝」は、鳩摩羅什をはじめとする西域僧が伝えた伝記の集成であっただろう。それが『歴代三宝紀』（597）の成立以前に文書として存在していたことは確かである。敦煌写本の遺文は『付法藏因縁伝』の文言ではなく、確かに『龍樹菩薩伝』の文言と一致しているから、現存する『龍樹菩薩伝』の元になった文献の成立は、この写本の書写年代以前に遡ることができるだろう。本論では、『出三蔵記集』には記載されていなかったその「龍樹伝」が、編集と転写を繰り返す中で、a本、b本に分岐し、a本はその編集過程において『付法藏因縁伝』を参照したであろうという仮説をたてた。この書が『龍樹菩薩伝』という名を冠し、鳩摩羅什の訳書として認識されるようになったのは、ようやく吉蔵の時代になってからのことであったかもしれない。こうした性格の文献の成立をどの時点に定めるべきであるのかは、問題となる

ところである。しかし少なくとも、『龍樹菩薩伝』は、鳩摩羅什の時代に一人の弟子によって記録されたものではなく、また『付法藏因縁伝』を直接の典拠として述作されたものでもない、ということは言い得るだろう。

参考文献

Henri Maspero, “Sur la date et l’authenticite du Fou ga tsan yin yuan tchouan”, *Mélanges d’Indianisme: offerts par ses élèves à M. Sylvain Lévi* (Ernest Leroux, 1911)
Richard H. Robinson, *Early Madhyamika in India and China*, (University of Wisconsin Press, 1967)

Stuart H. Young, *Conceiving the Indian Buddhist Patriarchs in China*, (A dissertation presented to the faculty of Princeton University in candidacy for the degree of doctor of philosophy, 2008)

落合俊典「興聖寺本『馬鳴菩薩伝』について」『印度學佛教學研究』第41巻第1号(1992)

———「僧叡と馬鳴菩薩伝」『印度學佛教學研究』第44巻第2号(1996)

———「二種の『馬鳴菩薩傳』—その成立と流布—」『七寺古逸經典研究叢書』第5巻(大東出版社2000)

蓮澤成淳『国訳一切経 和漢撰述 74 史伝部 6』「龍樹菩薩傳解題」「提婆菩薩傳解題」(大東出版社, 1936)

山野智恵「初期の龍樹伝」『蓮華寺佛教研究所紀要』2(2009)

付記 本論執筆にあたり、国際仏教学大学院大学学術フロンティアRA、定源氏より、敦煌写本の『金剛暎 裏面、および『龍樹菩薩伝』の遺文について、御教示をいただいた。ここに記して、御礼申し上げたい。

Summary

Two Biographies of Nāgārjuna

Chieko Yamano

The *Longshu pusa zhuan* (龍樹菩薩伝, the *Biography of Nāgārjuna*, T. no. 2047) translated by Kumārajīva (350–409 or 344–413) is known as the oldest biography of the great Mādhyamika philosopher. Although the authenticity of Kumārajīva’s translation is now questioned, it is held to be translated or written in the period around Kumārajīva’s activity. However, Stuart H. Young recently proposed the hypothesis that the biography was fabricated based on the *Fufazang yinyuan zhuan* (付法藏因縁伝, the *Dharma-treasury transmission*, T. no. 2058) dating the late 5th century.

The *Longshu pusa zhuan* (龍樹菩薩伝) is almost same in content as a biography of Nāgārjuna appeared in the *Fufazang yinyuan zhuan* (付法藏因縁伝) and we can find many parallel phrases between them. As to the anteroposterior relationship between the two texts, Henri Maspero mentioned that the *Fufazang yinyuan zhuan* (付法藏因縁伝) was fabricated around the 6th century based on the earlier buddhist texts including the *Longshu pusa zhuan* (龍樹菩薩伝). His opinion has been widely accepted.

In this paper, I will consider the anteroposterior relationship between the two texts by the following procedures. First, I will compare their sentences and contents. And second, from the point of view of the existent manuscripts and the printing editions of *Song* period which were newly found after the *Taisho* edition, I will reconstruct the history of editing of the *Longshu pusa zhuan* (龍樹菩薩伝). The considerations will lead to the conclusion that there was the third text that was the original of the existent *Longshu pusa zhuan* (龍樹菩薩伝), and that was one of sources of the

Fufazang yinyuan zhuan (付法藏因縁伝).

*Postgraduate Student,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies*